中高生とともに差別と闘う

『少しずつ積み重ねる』

吉成タダシ

劇「ナツノオト」事後報告

八月号で紹介させていただいた、劇「ナツノオト」。無事に上演することができました。今回はそのことについて。

これまで、部落問題や障がい者問題、空襲や原爆、シベリア抑留など、様々な問題について、中学生とともに劇や映画制作に取り組んできました。そしてその経験は、想像以上に子どもたちに残っていくことが分かってきました。

常々ここに書いてきたように、「子どもたちの心に後々まで残り、生き続けていく人権学習を」と思っているのですが、現実的には、なかなか残っていなかったりします。それは若い教員への聞き取りからもうかがえます。たとえ残っていても、あまり良くない印象でしか残っていなかったりです。なぜか？　やはり、主体性の低い受動的な学習の結果ではないかと思われます。では、いかにすれば主体的な学習となるのか？

有名なラーニングピラミッドを引用すれば、受動的な「講義」形式では、平均定着率が5％。最も学習率が低いとされています。今でもこのようなパターンの学習形態は続いていないでしょうか。

また以前から紹介している「集団で語り合う」ような学習形態で見受けられる、「グループ討議」形式では50％、「人に教える」形式となると90％のようで、定着率が高く、有効な学習形態といえます。

そして劇への取組を、「デモンストレーション」形式とすれば30％、自らの体験ではありませんが、疑似体験として「自ら体験する」形式とみれば75％。やはり、「講義」形式と比較すると、格段に定着率の高い学習形態であるといえます。

少しずつ積み重ねる

「劇に取り組む中で、細かいところまでの指示がたくさんありました。特に念を押して言っていたことが一つ、私の心に強く印象に残っています。それは、恥ずかしさを捨てて、その登場人物になりきるということです。しかしながら私たちにはなかなか難しいことでもありました。演劇部でもない私たちは、やはり少しためらいがありました。けれど、日々の練習を重ねるうちに、少しずつ恥ずかしさがなくなっていくように感じました。一日二時間の日々の積み重ねが、きっと素晴らしい作品を生み出すことにつながったのだと思います。（中三生S）」

「初めのころは恭江さんと恭子さんが同一人物であることも分かっていませんでした。でも話を聞いたり、劇の内容を集中して見たりしていくと、名前を変え偽名を使っていること、昭ちゃんと祖父ちゃんの三人の関係性など、ほんの少し分かった気がして、何度も何度も練習を重ねていくうちに、少しずつだけど、この物語がどういう物語なのか、ほんの一欠片だけですが分かっていくようでした。終わったあとちょっとした達成感がありました。（中二生K）」

専門性のない中学生がいきなり演じるのですから、上手くやれるはずがありません。これまで見てきた中学生もそうでした。けど、いざやるとなると、繰り返し繰り返し台本を読むしかありません。日ごろの学習で、これほど真剣に何度も読み返し、観ることがどれくらいあるでしょうか。この反復学習に、心情の読み取りが加わるのですから、学習効果が上がらないはずがありません。

共感から連帯へ

また他の生徒会メンバーの感想から、共感の輪の拡がりを感じます。あとはこの共感を、どう連帯へと高めていくか。そこが、今後の課題といえます。

「今日の本番は、今までで最高の出来だったと思います。夏休みの限られた時間の中で、あのクオリティの劇を作ることができたのは自分でもびっくりしています。どの程度伝わるのか不安だったけれど、終わった後に、「良かったよ」「めっちゃ考えさせられた」などの言葉をもらいました。そのときに、「伝えたいことは伝わったんだな」と実感することができました。（中三生K）」

「この文化祭が終わった後、「生徒会のナツノオトの劇よかった」「泣きそうになった」という声を聞きました。この声を聞いたとき、今まで練習してきたことがよみがえって、「ナツノオト」をみんなで作りあげることができて良かったと感じています。

私がハンセン病の存在を知ったのは小学五年生の時で、家族でさえその人を守れない病気ということを知り、衝撃を受けました。でも当時は、なぜ家族がハンセン病の患者を隔離したり、治っても帰れないのだろうと、そのことについてあまり理解できていませんでした。

「ナツノオト」の劇に取り組んだことで、ハンセン病にかかった人の気持ち、家族の気持ちが少し分かったような気がします。また、この差別によってお祖父ちゃんと恭子さんの80年のように、つらい生活を長く強いられてしまっている人が多くいることや、人が作りあげた差別の重みを強く感じました。大島青松園へ行って、現地をこの目で見てみたいと思う気持ちが、以前よりも強くなりました。この大島青松園も、本来は存在しなくてもよかった、人間の差別心によって作りあげられたものだと感じました。この現実が、過去の日本であったこと、今もなおその影響を受けている人がいることを、この劇を通して、多くの人に伝えることができたかなと思いました。（中三生A）」

ということで、この文化祭上演二日後の代休日、生徒会メンバーは、実際に香川県にある国立ハンセン病療養所大島青松園を訪れることになります。その日のことについては、また次号で。

イラスト　中島　亜唯